

論文

親の幼児への抱きしめ行動が対児感情に与える影響

権田 あずさ¹⁾

キーワード：対児感情，身体接触，親子，抱きしめ，父親

1. 研究の背景と目的

本研究は、今川ら（2007, 2008）が実施した研究の追試験を行うことで、親から子への「抱きしめ」行動が、親の子に対する感情(イメージ)に与える影響について再検証することを目的とした。

親子間の身体接触の意義や効果については、特に子どもへの影響という側面から数多く報告されてきた（例えば、山口・山本・春木, 2000；山口, 2003；藤田, 2012）。親から子への身体接触が、親にもたらす効果については、看護におけるタッチケアや助産分野のカンガルーケア、ベビーマッサージに関する報告が多数ある（例えば、山本・三巖・山口, 2008；赤上・加納, 2012；渡辺, 2013）。しかしながら、これら先行研究の多くは母子を対象としたものであり、父子間の身体接触の効果については、知見の蓄積が十分にされてきたとは言いがたい。また、親子の心的交流や愛情表現として、身体接触を取り上げたものも未だに数が少ないのが現状である。さらに本研究は、親から子への具体的な対児行動から、親子間の身体接触の効果について検討するものである。

2. 研究方法

1) 調査対象者

調査対象者は、岡山市内にあるA幼稚園の年長組、年中組、年少組に属する園児とその保護者であった。A幼稚園には、年長組、年中組、年少組がそれぞれ2クラスずつ配置されている。本研究では、父親と母親の比較が可能となるように、各年齢の2クラスの内、一方のクラスは父親に、もう一方のクラスは母親に協力を依頼した。具体的には、年長組45名（父親23名、母親22名）、年中組36名（父親17名、母親19名）、年少組41名（父親21名、母親20名）に研究依頼を行った。

2) 研究の手続き

本研究の手続きについては、今川ら（2007, 2008）に従った。以下が本研究の手続きの概要である。

- (1) 日常の親子の関わりと、日常場面における子どもへの身体接触に関する質問紙調査
- (2) 対児感情評定尺度の実施
- (3) 抱きしめ実施実験

¹⁾ 山陽学園短期大学こども育成学科

対児感情評定尺度で得られたデータは得点化したのち、対応のある t 検定を実施し、抱きしめ実験前後の対児感情の変化を検証することとした。

なお、本研究は、山陽学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 2021C001)。

3) 調査および実験の日程

本研究では、匿名性を保ちつつ、児の年齢および性別、保護者の性別による比較を可能とするため、研究依頼書をはじめとする調査用紙等の書類は、一式をまとめて配布した。書類一式は、2021年12月24日に配布し、質問紙調査と1回目の対児感情評定尺度票は2022年1月7日に回収した。抱きしめ実施実験を1月8日から1月17日の10日間にわたって行った後、1月20日に2回目の対児感情評定尺度調査票を回収した。さらに、3回目の対児感情評定尺度票を2月21日に回収依頼した。

3. 結果と考察

本稿では、研究依頼をした対象者のうち、研究同意書の提出と、質問紙および抱きしめ前後の対児感情評定尺度票への回答があった37名(年長組父親3名・母親7名、年中組父親4名・母親8名、年少組父親6名・母親9名)を分析対象とした。

1) 父母の児との日常的な身体接触

図1に、父親の児との日常的な身体接触についての結果を、また、図2に母親の児との日常的な身体接触についての結果を示す。「頭をなでる」、「ひざにのせる」など多くの項目について、母親よりも父親が「頻繁にした」と回答した割合が高かった。中でも、「肩ぐるまをする」、「だっこする」、「お馬さんごっこをする」などのような、子どもの身体全体を支えるような身体接触は、母親よりも父親に多かった。

「からだをだきしめる」行動について、父親と母親のいずれも「頻繁にした」との回答が約80%にのぼり、「全くしなかった」と回答したものはなかった。このことから、本研究の調査対象者である父母が、日常的に子どもの身体を抱きしめていることが明らかとなった。

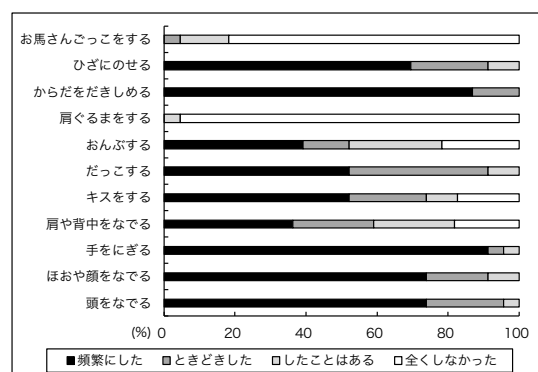
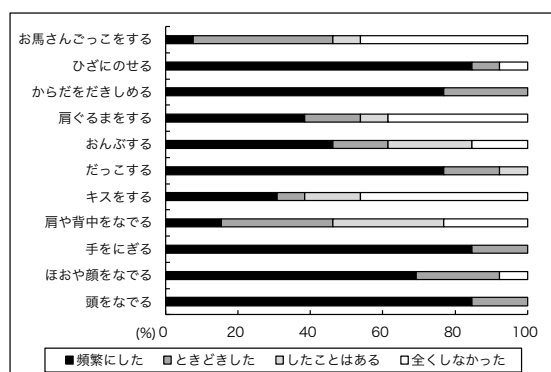


図1 父親の児に対する日常的な身体接触行動(n=13) 図2 母親の児に対する日常的な身体接触行動(n=24)

2) 抱きしめの実施状況

父親と母親が10日間の抱きしめをどの程度実施できたかについて、図3にその結果を示す。父親の約60%が、「毎日(抱きしめが)できた」と回答し、残りの父親は「ほとん

どできた」と回答した。母親についても、「毎日できた」と回答したものが約 60%と最も高い割合を示し、次いで、「ほとんどできた」が約 30%、「半分くらいはできた」が約 10%と続いた。この結果から、多くの父親と母親が、本実験へ積極的に協力してくれたことが伺えた。

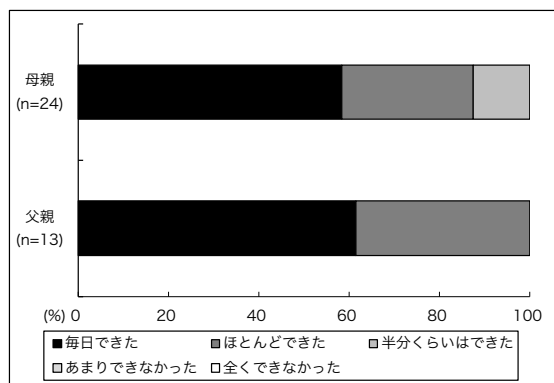


図 3 父親と母親の抱きしめ実施状況

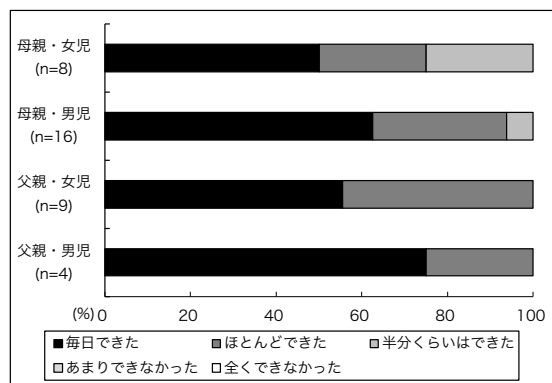


図 4 児の性別にみた父親と母親の抱きしめ実施状況

抱きしめの実施状況を、児の性別に図 4 に示す。抱きしめが「毎日できた」と回答した割合は、男児の父親が最も高く、75%にのぼった。「毎日（抱きしめが）できた」と回答した割合は、男児の父親に次いで男児の母親に高かったことから、女兒よりも男児に対して抱きしめ実験を積極的に実施したことがわかった。

抱きしめ実施実験中の様子について、父親と母親別に図 5 に示す。約 40%の父親が、「黙って抱きしめた」と回答し、最も回答割合が高かった。本実験では、抱きしめる際に児が就寝していた場合は、寝ている児を抱きしめるよう依頼していた。本研究の調査対象は幼稚園であったことから、多くの場合、父親がフルタイムで就業していると考えられ、児が起床している時間に帰宅できないことがこの結果に関係したものと推察された。抱きしめ中の様子として、母親に最も多かったのは、「互いに色々と話しながら」抱きしめたという回答であった。これは、父親においても 2 番目に回答が多かった項目であった。父親の「黙って抱きしめた」という回答を除いて結果を概観すると、抱きしめ中の様子についての回答割合に顕著な差異は認められなかったことから、抱きしめ中の様子は親子により様々であったことが伺えた。また、抱きしめは 10 秒程度継続してもらうよう依頼していたことから、「その他」として「10 を数えた」といった回答が見られた。

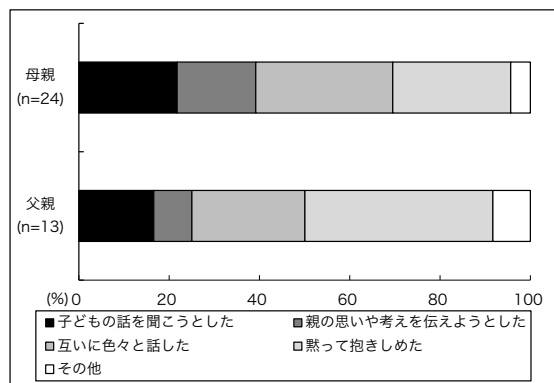


図 5 父親と母親の抱きしめ中の様子

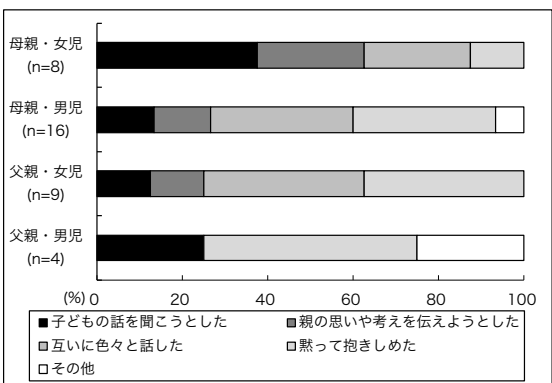


図 6 児の性別にみた父親と母親の抱きしめ中の様子

抱きしめ中の様子について、児の性別に図6に示す。先の図5において、黙って抱きしめた父親が約40%いたが、児の性別に見ると、これは男児の父親に多かったことが明らかとなった。加えて、男児の父親には、親子で互いに色々と話をしながら抱きしめを実施したものはいなかった。

3) 抱きしめによる対児感情の変化

10日間の抱きしめ実施前後における父親の対児感情の変化を図7に示す。10日間の抱きしめによって、父親の児に対する接近得点には上昇が見られ、回避得点には低下が見られたが有意な差は認められなかった(接近： $t(12)=1.29, p=.221$, 回避： $t(12)=0.78, p=.450$)。

抱きしめ実施前後における母親の対児感情の変化を図8に示す。母親についても、抱きしめ前後における対児感情の有意な変化は認められなかった(接近： $t(23)=0.25, p=.805$, 回避： $t(23)=0.28, p=.782$)。

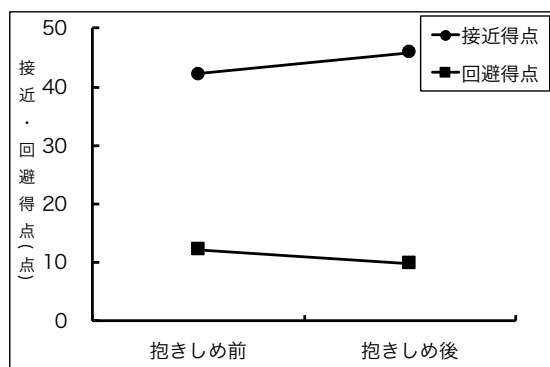


図7 父親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

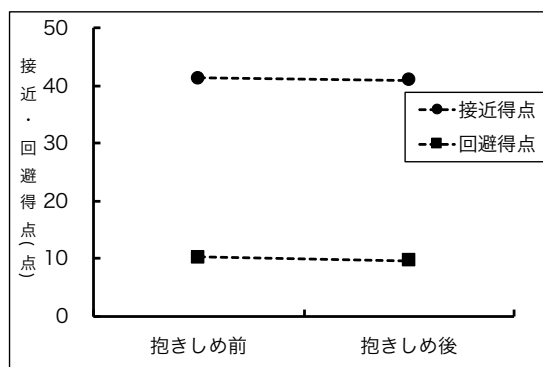


図8 母親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

抱きしめ実施前後における父親の対児感情の変化を、児の性別に図9に示す。抱きしめの前後にかかわらず、男児の父親の児に対する接近得点は、女児の父親よりも高く、回避得点は低い傾向があった。女児の父親の接近得点は、抱きしめ前後で上昇が見られ、男児の父親の接近得点に近づいたが、有意な変化は認められなかった($t(8)=1.31, p=.226$)。男児の父親の回避得点は、抱きしめ前後で有意な低下が認められた($t(3)=3.58, p=.037$)。これに伴い、父親の児に対する肯定的な感情と否定的な感情の相克度を表す拮抗指数も、抱きしめ前後で有意に低下した($t(8)=3.57, p=.038$, 図10)。

抱きしめ実施前後における母親の対児感情の変化を、児の性別に図11に示す。抱きしめ前後において、母親の接近得点は、男児と女児のいずれにおいても有意な変化は認められなかった(男児： $t(15)=0.40, p=.695$, 女児： $t(7)=0.71, p=.502$)。回避得点も同様に、抱きしめ前後の変化は見られなかった(男児： $t(15)=0.46, p=.655$, 女児： $t(7)=0.23, p=.822$)。女児の母親の児に対する回避得点は、男児の母親の得点よりも低い傾向があった。

抱きしめ実施前後における対児感情の変化を、児の年齢別に図12に示す。抱きしめの前後で、接近得点の上昇や回避得点の低下が見られたが、いずれも有意な差ではなかった(年少・接近： $t(14)=0.05, p=.964$, 年少・回避： $t(14)=0.02, p=.984$, 年中・接近： $t(11)=1.14, p=.277$, 年中・回避： $t(11)=0.70, p=.497$, 年長・接近： $t(9)=0.28, p=.786$, 年長・回避： $t(9)=1.22, p=.252$)。年長の保護者の接近得点は、抱きしめに関わらず他の年齢よりも若干高い傾向が見られた。

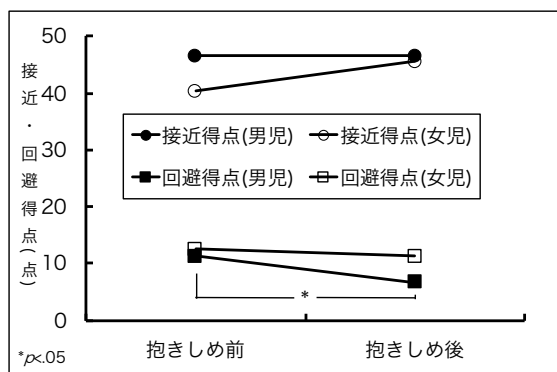


図 9 児の性別にみた父親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

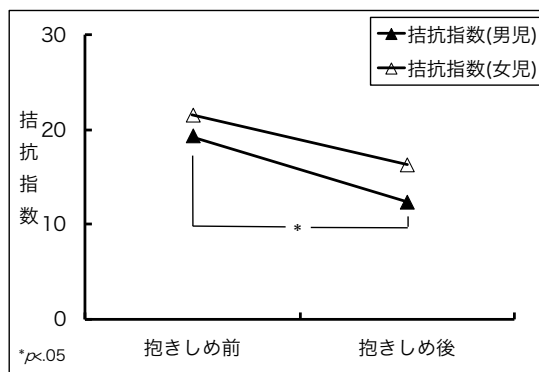


図 10 児の性別にみた父親の抱きしめ実施前後の拮抗指数変化

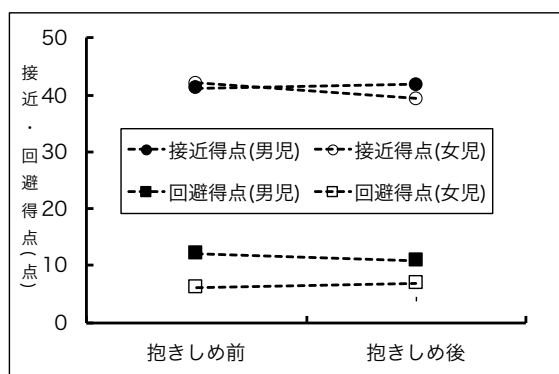


図 11 児の性別にみた母親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

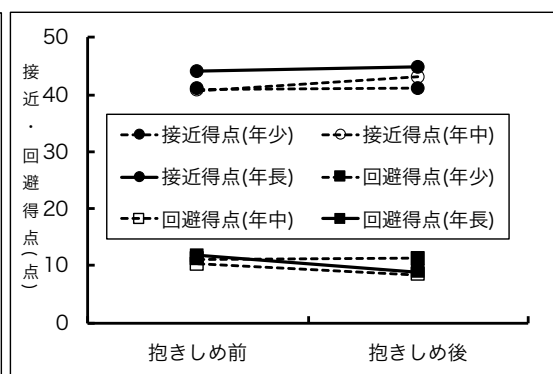


図 12 児の年齢別にみた親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

4. 総括と今後の課題

質問紙調査より、被験者であった父親と母親は、児に対して日常的に身体接触行動を表出していたことが明らかとなった。とりわけ、「からだをだきしめる」行動は、表出頻度の高い身体接触行動のひとつであった。10日間の抱きしめ実験の実施状況から、父親と母親の積極的な実験協力の様子が伺えた。特に、男児の父親の抱きしめ実施率は、他の父母に比べて高かった。抱きしめ実施実験前後における対児感情得点より、男児の父親の回避得点の低下が認められた。日常的に我が子を抱きしめている本研究の父親にとって、抱きしめ行動は特別な行動ではなかったにも関わらず、父親が意識的に男児を抱きしめることで、男児に対する否定的な感情が抑制される可能性が示唆された。ただ、抱きしめ中の様子を尋ねた質問紙調査の結果から、男児の父親は児を黙って抱きしめたと回答した割合が高かった。先に述べたように、本調査は幼稚園の父母を対象としたため、多くの父親はフルタイム勤務であると考えられる。これらの父親が、男児を黙って抱きしめたとという結果から、父親は就寝している男児を抱きしめた可能性が考えられる。仕事から帰宅した父親が、我が子の寝顔を見ながら静かに抱きしめることは、疲れも忘れ、明日への活力となるのかもしれない。今川ら(2007)は、10日間の抱きしめ実施後に、父親の児に対する否定的な感情得点が上昇する傾向があったことを報告している。このことについて、「普段より親密に児と接触しようとしたことで、児のマイナスの面に直面することが起こったせいかもしれない」と考察している。今後は、父母の就業状況や、抱きしめの状況、抱きしめ中の親子

の様子についても詳細に調査し、それらとの関連を検証する必要がある。

本研究では、今川ら(2007, 2008)が指摘した、母親の男児に対する偏好性や、児の年齢による対児感情の変化については確認できなかった。ひとつには、各属性の被験者数を十分に確保できなかったことが要因として挙げられ、調査用紙等の配布・回収方法について再考が必要である。また、本稿の執筆時点では、抱きしめ実験から約1カ月後に実施予定の3回目の対児感情評定尺度票の回収に至っていないため、抱きしめることによる親の児に対する感情の安定性を検証する予定である。

謝 辞

本研究にご協力いただいた A 幼稚園の先生方ならびに園児のみなさんと保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

付 記

本研究は、令和2年度山陽学園大学・短期大学学内研究補助金の助成を受けて実施したものである。

引用・参考文献

- 赤上涼子・加納尚美(2012). ベビーマッサージが母親の育児に及ぼす効果について. 茨城県母性衛生学会誌, 30: 68-73.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・三宅瑞穂・落合さゆり(2007). 「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージと子どもの行動に与える影響に関する研究(1). 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 36: 415-423.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・上松由美子・松本信吾・(協力者)松浦あずさ(2008). 「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージに与える影響に関する研究(2). 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 37: 253-258.
- 藤田文(2012). 子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 50: 81-93.
- 渡辺香織(2013). タッチケアが産後1～2カ月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響. 母性衛生, 54(1): 61-68.
- 山口創・山本春義・春木豊(2000). 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連. 健康心理学研究, 13(2): 19-28.
- 山口創(2003). 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響. 健康心理学研究, 16(2): 60-67.
- 山本正子・三巖真砂枝・山口創(2008). 新生児期のタッチケアが母親の胎児感情に及ぼす要因. 母性衛生, 49(2): 261-266.